

万葉集のご講義の後は、  
たくさんの興味深い情報に、頭の中が賑やかになります。  
静かな喫茶店でおさらいをしながら、頭の整理をしつつ  
じっくりと万葉の世界に浸れるのは、とても贅沢な時間です。

先日、知ったばかりの坂上郎女の歌を空で言いながら、歩いていました。

(家刀自として、母としての奮闘が見える郎女の歌には、  
一家の主婦として、元気をもらいます)

何気なく立ち止まって見上げた看板には、『坂の上珈琲店』  
これぞ、万葉のミラクルと思い扉を開けました。  
静かな店内に足を踏み入れると、  
ピカピカに磨かれた、黒く光るカウンターに大きなテーブル。  
なんとも香ばしく優しいコーヒーの香り。  
思索の世界に浸るに、ぴったりの場所でした。

後日、市瀬先生にお伝えしましたら、  
「郎女が、いらっしゃいませ。なんて出てきてくれたら、小説になりそうですね」  
と返してくださいました。  
先生はどんな些細なことも、愉快地拾ってくださいます。

「それは面白そうな…！」

楽しいヒントをいただいて、万葉おさらい日記を書きました。

創作・万葉能～番外編～

## 『坂の上珈琲店』

とある街。

坂道を頂上まで登りきり、息も最高に上がりきった頃

レンガ作りのビルヂングがあらわれます。

最後のダメ押しで階段を昇ると、そこに

『坂の上珈琲店』があります。

年季の入った扉を開けると、

からん、ベルの音とともに『いらっしゃいませ』と女将さん。

まるで、万葉の時代からタイムスリップしたかのような、

ふんわりと結わえた髪に、ゆったりと着付けたお着物姿。

「ママ」よりも「女将さん」が似合います。

私はこっそり、『坂上郎女の女将』とお呼びすることにしました。

奥では、物静かなマスターが、コーヒー豆を焙煎していました。

郎女のご主人なので、こちらもこっそり『宿奈麻呂の旦那』と、呼ばせていただきます。

郎女女将に「お好きな席にどうぞ」と促され、

迷った末、柱と柱に挟まれて、壁にうまったひとり席に座りました。

囲まれるのが大好きです。落ち着きます。

窓際には、色とりどりのコーヒーカップが、西陽に照らされ飾られていました。

『どうぞお好きなカップを選んでくださいね、お入れしますから』

鮮やかな桃色に若草色、落ち着いた山吹色の花模様……

あまりにも綺麗なカップたちに、うっとり選び兼ねていると

何だか、うとうとしてきました。

色とりどりのコーヒーカップが、ぐるぐる目の前で回り出します。

『ゆっくり、ゆっくりでいいのですよ、決まったらお呼びくださいね。』

郎女女将が優しく言ってくださいました。

そこにドアベルが鳴り、  
若い男性の二人組が来店、カウンターに並んで座った模様です。  
話ぶりから、どうやら常連さんのようです。

青年たちの会話が、うとうとの耳に入ってきます。  
若者の会話にしては、随分に古風な物言いなのだなあ…

**「妹が家に咲きたる梅の何時も何時もなりなむ時に事は定めむ」**

あなたの家に咲いた梅の花がいつでも（実）になった時に事を決めましょう。

（藤原朝臣八束 卷3・398）

**「妹が家に咲きたる花の梅の花実にしなりなばかもかくもせむ」**

あなたの家に咲いた梅の花が、実になったらああもしましょう、こうもしましょう。

（藤原朝臣八束 卷3・399）

**「梅の花咲きて散りぬと人は言へど我が標結ひし枝ならめやも」**

梅の花が咲いてもう散ったと人は言っているけれど、我が印をつけておいた枝ではないでしょうね。（大伴宿禰駿河麿 卷3・400）

この会話、どこかで聞いたことがあります。  
万葉集は、卷三・梅の歌。

ということは、青年二人組は、  
藤原朝臣八束さんと、大友宿禰駿河麿さんでしょうか。  
梅の花とは即ち、二人の恋模様・・・  
会話の内容から、どうやら郎女女将の娘さん方のことのようにです。

…私はいったい、どこに迷い込んでしまったのでしょうか。

あ、女将がいらした。  
二人組さん、そんなところで堂々と恋のお喋りをしていると  
郎女女将に聞こえてしまいますよ。

『あなたたち、もしや？私の可愛い可愛い娘たちのこと、話しているのかしら？  
簡単に、渡したりなどできませんよ。大切に育てた娘なのですから。  
私のお眼鏡にかなうなど、それは大変なことではないかしら』

不敵な笑みを浮かべて、郎女女将、堂々と歌を詠みます。

～山守のありける知らにその山に標結ひ立てて結ひの恥しつ～  
山の番人がいるのも知らないで、その山のしるしを結んで、  
「結ひの恥」をしたことよ。  
(大伴坂上郎女 卷3・401)

若者二人はどう返すのでしょうか。気になります…

即座に唱和したのは、駿河麿さんの方でした。

～山主はけだしありとも吾妹子が結ひけむ標を人解かめやも～  
山の番人はあるいはいまいしょうとも、あなたが結んだしるしを  
人がとくなどということがありましようか。  
(大伴宿禰駿河麿 卷3・402)

先ほどより、少し表情和らぐ郎女女将。  
またも問いかけます。

～橘をやどに植ゑ生ほし立ちて居て後に悔ゆとも駿あらめやも～  
橘を我が家の家の庭に植ゑ育て、立ったり座ったりした後に  
(人に取られて) 悔やんでも、何の甲斐があるというのでしょうか。  
(大伴坂上郎女 卷3・410)

すかさず答える駿河麿さん。

～吾妹子がやどの橘いと近く植ゑてし故に成らずは止まじ～  
あなたのお庭の橘は、とても近くに植ゑてあるのですから、  
実らせずにはおけません。  
(卷3・411)

……どうやら、駿河麿さんの積極的な姿勢が好印象の模様。

郎女女将の表情が物語っています。  
この恋の行方はいったいどうなっていくのでしょうか。

「ふふふ、」と笑った自分の声に気がつき……あれ、私は眠っていたのでしょうか。

気がつくと、カウンターの青年はすでにおらず、  
郎女女将が向こうで微笑んでおられました。

『お決まりになりましたか、コーヒーカップ』

『はい、では、そちらの綺麗なオレンジ色のをお願いします。』

『あら、お目が高い。

これ、橘色。私が一番好きな色。綺麗でございましょう。

橘って好きなんですよ、私。

初夏には可愛らしい真っ白な花が咲いて、

秋には小さな実がなって、冬には鮮やかな橙色になって

それはそれは爽やかな香りを、周りに醸し出すのですよ。

あら、なんだか娘たちのこと、思い出してしまいますわね。

子育てってあっという間ですわよ。

大事に大事に育てても、いつか誰かのもとへ行ってしまう。

嬉しくもあり、寂しくもあり、、ですわね。

そうね、今日は

とっておきの爽やかな柑橘の香り、軽やかなコロンビアコーヒー、  
お入れしましょうね』

まだまだ子育て真っ最中の私の生活は、慌ただしくすぎてゆくばかりですが、  
郎女女将と同じように、私もいつか懐かしく、振り返る日が来るのでしょうか。  
大切なコーヒー、大事に味わっていただきます。

